

# 生徒21人がボランティア

## 大阪・相愛高 能登半島の海岸を清掃 住民と交流



宗門校の相愛高校（園城真生校長、大阪市中央区）の生徒21人が夏休みを利用して7月28日から3日間、能登半島地震で被害を受けた石川県でボランティア活動を行った。同校が同地震でボランティアを派遣するのは初の試み。現地を訪れた生徒たちは、活動と交流を通して多くのことを学んだ。

ボランティアの募集には、予想をはるかに上回る36人が応募、生徒の関心の高さを伺わせた。宿泊する宗派能登半島地震支援センター（金沢市・金沢別院内）の定員もあり21人に絞って実施。参加生徒は、事前学習で現役女性自衛官から支援のあり方、被災者との接し方の助言を受けて活動に臨んだ。

初日は、支援センターで結団式と翌日からの打ち合わせ。川井周裕センター長からも被災地の現状を聞き

などを歌い、なごやかなひとときを過ごした。

木津喜乃さん（2年）は「ボランティアの現場に向かう車窓から、倒壊した家々を見て、現実に起きた出来事なんだと実感した。同時に、自分ができることがあるのかと不安になった」と活動前の心境と、「被災した人から『皆さんみたいなボランティアのおかげで何とか頑張れている。ありがとう』と言われ、参加してよかったと思った」と気持ちの変化を語った。自宅に戻り、家族に現地の様子を伝えたという。「少しでも多くの人に現状を知ってもらうことで、ボランティアの数が増えるとうれしい」と付け加えた。



医療従事者を志す山路悠華さん（2年）は交流会を振り返り、「相手を傷つけた

くないという緊張感で初めはどう話していいのかわからなかったが、被災者の方たちが積極的に話しかけてくださり緊張がほぐれた。被災者同士で助け合っているのが印象に残っている。普段から近所の人たちと良い関係を作っているから、いざというときに助け合える。医療従事者として被災地を訪れる時は、この経験を生かし、ご近所さんのような心で接することで被災者の方の心身を少しでも和らげられたら」と語った。

引率した同高校宗教部長の木岡義人教諭は「実際に活動してみないとわからないことがあり、現地を訪れることで、自分ができることが何かしら見つかる。清掃活動や炊き出しなど高校生だけでもできる支援があることを生徒に知ってもらえた。みんな最初は不安だったと思うが、多くの体験をさせていただいた。この経験をこれからの人生の糧にしてほしい」と話した。